



## 第47回 春よ来い－インフルエンザ今昔－

## ▼如月は寒し

如月（2月）上旬の氷点下を記録する極端な冷え込みのとき、家の中にいても「寒い」と感じる夜がつづいた。寒いときは炬燵に限る、ぬくぬくとして眠気がまわってくる、そのままうつらうつら、まことに気持ちがいい。でもこの寝かたは脱水になりやすく風邪もひきやすい。とくにこの時期はインフルエンザに要注意だ。

## ▼インフルエンザ今昔

この季節はインフルエンザ流行の時期もある。勤務先の病院でも、次から次に発熱、インフル疑いの患者さんがやってくる。しかも、高熱や関節痛など典型的な症状がなく、軽い風邪症状や胃腸炎症状だったりして、どうにも診断が難しい。鼻咽喉頭ぬぐい液を使う抗原検査もできるので、「インフルかどうか検査してください」といわれる患者も多い。ところが、上記のように症状が非典型的で、かかりはじめの時期には、インフルエンザであっても必ずしも陽性にならない。だいたい抗原検査の感度は60%といわれているので、40%は偽陰性（インフルエンザでも陰性）となる。さらにインフルエンザと診断しても、治療をどうするかという問題がある。もともと健康な場合、インフルエンザは5日以内にだいたいおさまってしまうので、高熱や関節痛に対して解熱鎮痛剤を使い、あとは他人にうつさないように自宅で静養するしかない。ちまたで多用されている抗インフルエンザ薬は、病初期に使えば発熱期間を短縮できるが、わずか半日程度である。健康な人は水分をしっかりと休むことが先決だ。もちろん、高齢者、幼児、心臓病や肺疾患を患っている患者など、インフルエンザに伴う肺炎リスクの高い患者には抗インフルエンザ薬を使ったほうがよい。

ところが、患者さんのなかは、「インフルならタミフル（抗インフルエンザ薬）を出してください」といわれる人も多い。世界中でこれほどタミフルを多用している国は、日本だけである。インフル疑いの膨大な患者さんが医療機関へ押しかけパ

ニックのようになっている。インフル（疑）患者が集中することで、病院にとって本来必要な医療業務が滞り、通院や入院している人（抵抗力の弱い人）のすぐ近くまでインフルエンザウイルスが持ち込まれる。「持病がなく元気な人は、インフル疑いなら仕事を休んで自宅静養」と指示したほうがよほど適切ではないのか。職場も学校も、「病院でインフルエンザと確定してもらいまさい」という無意味なルールを課すことはやめよう。近くにインフルエンザ患者がいて、その後に症状がでれば、あなたはインフルエンザとして対処すべきである。こういう主張をすると、「もし重病になつたらどうする」「インフル確定できなければ、疑わしい人はどうすればよい」と批判する人がいる。そういう人は、「不確実だが隔離予防する」という、感染予防の基本原則を学ぶべきである。そして、マスク着用や手洗いなど、きちんと守ることがインフルエンザの拡大を抑えるにはとても大切なことを知ってほしい。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)